



LeLe!びくび
Vol.35

Adult only



目次

表紙	イラストレーション	流一本	
中扉	イラストレーション	流一本	
目次&まえがき			2
こみっく&イラスト (ガールス&パンツァー)		流一本	3
SS 引き抜き前に啜えこむ (ガールス&パンツァー)		白朧	17
奥付			

まえがき (ページ調整のため)

白朧
くろうさぎ
流一本
くろうさぎ
白朧
くろうさぎ

このたびはお買い上げありがとうございます。
令和最初のコミケです。これからもよろしく申し上げます。
秋にはガルパン最終章4DX見に行くんだ、4DXは近くでやるから楽。
地方だと劇場までの距離は結構ツライからな。ドラクエとかやってるんだろ。
ドラクエは近くでやっても怖くて観にいけない。最近虫系のトラブル多くて、ムカデとか蜂とか。
大変だな。

8月某日
ガルパン最終章1・2話4DXは秋公開

今年の戦車道全国大会
優勝校の副隊長とは：

よく手に入った
ものだな

マ○コも肛門も
いやらしい色と形を
させやがって

ああ…

あっ…

こりゃ
たまらんな

それでは
誰が最初に
なさいますか？

で…では
私が…

イヤッ
オレが！

何を言う
今日はワシからだ
言っておいたろう







ほらほら
戻りましょうね

お願い…
もうやめ…

やっ…



おしおき
しっかりして
もらいましょうね♥

た…頼む
やめてくれ
これ以上されたら
私…



ダメだ

や...

やめ...

絶対におかしく
なってしまう

ああん



お尻の中いっぱい
かき回されてるのに

まだあんなに
余ってるなんて

アレを全部
突き込まれたら



あち日んで
やじさ!!

んああん

あ

あ

あ



えっ
あ...



なんで...
抜いちゃ...

んあっ

安心しろ

ちゃんと
奥まで!

あ…

ああ♡

ほああ♡

直腸の奥を
こじ開けられたのが
わかるか？

ナンだ…
コレは…？

お…おちんぼ
スゴすぎりゆう♡

ひん♡
らめ…
らめえ♡

立派なケツマ○コに
育ててやるからな

アア♡

ア♡

ああん♡

イク♡
イク♡

ケツマ○コ
おチンポで
イっちゃう♡





さあ
射精すぞ
お嬢さん

あん♡

あっ♡

イクッ♡
イクッ♡
イクッ♡

おちんぼ♡

あ♡
あ♡

あ♡



プリプリの肉粒が
ねっとり絡んで
くるような
いいマ○コじゃ

こ…
壊れる…

私の中が
ぐちよぐちよに
壊されちゃうう



ほれほれ
気持ちよからう？

あ♡

あ♡

突起もこんなに
ぶつくりさせおって
感じまくりだな

ちゅ
ちゅ

おほー
よく伸びる
ケツ穴だ

チンポを啜えて
離さんぞ

い：いやあ
二本一緒になんて
こんなの：
おかしくなっちゃう

いいんやぞ
どんどんおかしく
なあってしまえ

あ♡

あはあ♡

あはあ♡



も…
ダメ…

あっ♡
あぁ♡

こんな
覚えさせられたら

あー♡

壊された…

私の何もかも
壊されて
しまった…

も…
いらや…

どうせ
私なんて…

誰にも必要とされて
ないんだから…

そんなこと
ないわよ



あなたを欲しいという人はたくさんいるのよ

あなたが望むなら

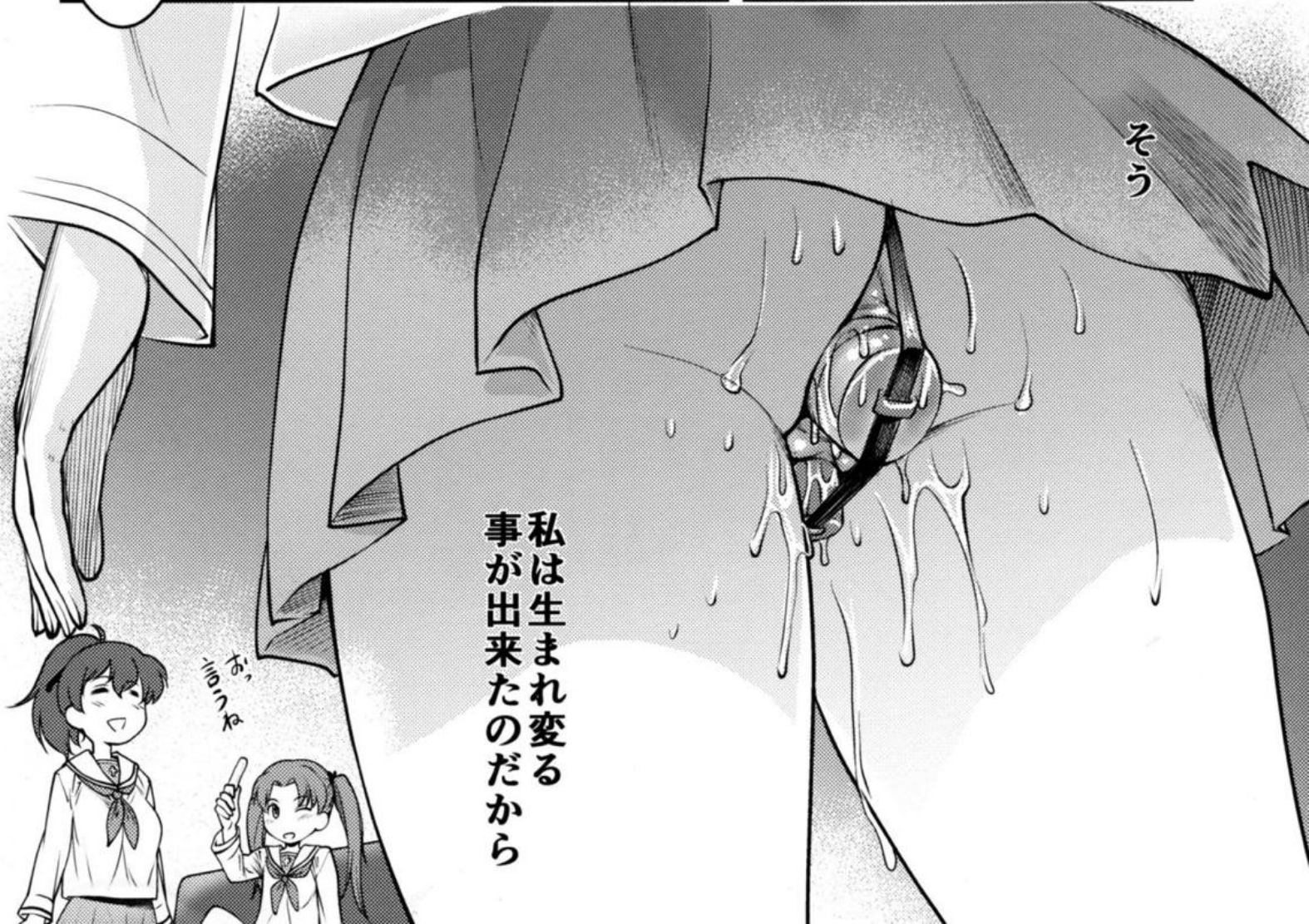
ああ...

いつでもここに戻っていらっしやい

お願いします
私のことをもっと使って下さい

.....私欲しかったものが

わかった...



引き抜き前に「啜え」む

西住流家、本邸

まほはある一室で少年と向かい合っていた。年若い将来有望な整備士で少し気の弱いところが欠点と聞いている。

裏方と思われる仕事だが、戦車道において重要な仕事である。西住流家元として有能な整備士はいくらいても困ることはなく、当然人員の確保も必須とも言える。他に行かれる前に確保する必要があるのだ。

まほと少年の間のテーブルには、液体が注がれたグラスが二つあった。琥珀色の液体を見て、母との会話を思い出す……。

「引き抜きですか？」

母である西住しほの言葉を繰り返した。

「そうです。最近、戦車道界で整備士の引き抜きが多く発生しています。本家からの引き抜きはあってはなりません」

まほは、西住流跡継ぎとして力強く首肯する。

さらに決意を固め、まほは少年に飲み物を勧める。少年は目の前に勧められたグラスに不安げな様子だ。

一日の仕事を終え、シャワーを浴び帰宅するとき呼びばれたのだ。今日の自分の仕事に落ち度があったかのかびくびくしていた。

まほの装いもその思考を助長していた。タンクジャケットや制服ではなく、レディーススーツ、しかも臀部からのラインを強調する

タイトスカートという出で立ちだ。

「これは……？」

「烏龍茶だ、心配するな」

こちらが呑まねば相手も動かないと見るや、まほは勢いよく、グラスの中のものを飲み干す。

「ほらッ……、しん……ばいする……な」

まほの頬が上気し、空ろな瞳になってしまふ。まほは立ち上がると、スーツの上着を脱いだ。白いブラウス一枚になると周囲に甘い体臭が強く立ち上る。

「暑い！」

上着を脱いでもまだ暑いらしく、ブラウスのボタンにてを掛けるが、うまく手が動かず時間がかかっていた。

慌てて止めよう手を伸ばすと、バランスを崩してまほへと倒れこんでしまふ。

「うわッ」

二人は重なるように倒れこみ、反射的にまほを抱きしめてしまふ。女の肢体は柔らかく、温かく、ふわふわした感触だった。酒と女の匂いが鼻腔をくすぐる。服越しに密着してくる双丘は信じられないくらい柔らかかった。

「まほさん……」

ブラウスから、白いブラジャーに包まれた乳房が見える。スカートもずりあがってしまい、太腿が丸見えになっている。

「うう……」

彼女に体重をかけるのは避けられたものの、まほの双丘に顔が埋まった。彼女の両手が背中に回り、身体がさらに密着し、顔が乳房に押し付けられる。

「うわッ、息が……」

密着してまほの体臭を嗅いでいると身体の奥から盛り上がってくるものを感じる。

「お酒の力を借りないとダメなのか……」

まほは頭を撫でながら、囁くように語り掛ける。

まほが仰向けになったままで、胸の真ん中のホックを外し、ブラジャーに収められていた乳房が、揺れながら飛び出した。

露わになった乳房は、ブラジャーの拘束から解放されたれより大きく見える。

「うッ」

目の前で揺れる胸のふくらみを見て息を呑んだ。揺れる乳房に恐る恐る手を伸ばした。

「柔らかい……」

乳房を両手で絞り上げて離したり、揉んだりと繰り返す。そして乳首を指先で押さえたとくに、まほの喉が鳴り、身体に震えが走った。

「んッ……」

彼女に覆いかぶさったままで、乳首を指の間で挟みながら乳房を揉んでいく。

「ああッ、んッ……、はッ……、はあんッ」

まほの顔が切なく歪み、息を弾ませる。半開きになった口唇から赤い舌が出て、さかんに唇に這わせている。

欲求を抑えられず、乳首に舌を這わせると、だんだんと硬く尖ってくる。

「ああ、あ、あああッ……」

まほが喘ぐたびに、乳首は硬く大きさを増していく。反対側の乳首にも食らいつくように吸った。甘い香りを感じ必死に吸い付いていく。

「はあッ、はあはあ……んッ……、あ、あああッ、んッ」

まほは、少年に覆いかぶされ、乳房を弄られ、乳首を据われて、興奮している。ずっと勃起状態だった男根が激しく欲情を訴えかけてくる。

「い……、入れたいッ！」

直接過ぎる男の欲求に、まほは首肯で返す。

「いいよ」

まほはやさしそうに微笑んだ。

まほの下肢に取り付き、スカートを捲り上げた。サイハイストッキングが太腿まで隠しているが、領域の上には生太腿が見え、その上にはショーツの奥底が覗いていた。

「脱がすよ……」

スカートをさらに捲り上げ、ショーツのゴムに手を掛けた。ショーツの奥底が溢れた蜜で楕円にシミが出来ているのが見える。

「うッ、ううッ」

さらにショーツを下げていくと、ヘアがまばらに生えた恥丘が覗き、次には包皮に隠されたクリトリスが見えた。大陰唇とショーツの裏側にねっとりとした愛液が糸を引き、ゆったりと垂れた。

まほが腰を浮かせてくれたので、お尻の方からショーツを下ろすと、果物の皮を捲るようにショーツが捲れる。そのままつま先から抜き、両足釘を持って深く倒す。

お尻が浮き、太腿の奥に隠されている秘唇が見えた。秘芽からお尻の穴まで全部が丸見えになる。ふつくらとした大陰唇にかすかに生えるヘアが情欲をそそる。

「ん……、恥ず……かしいな」

まほは恥らって顔を背けているが、大陰唇は興奮を露わに赤く充血し、スリットを綻ばせ、溢れた蜜に濡れて光っている。

秘裂の中央で、桃色の花びらが先端だけ覗かせている。割れ目の

中央から蜜が湧き出て、ヘソの方へと滴った。

「見られると……、はずッ、んッ」

自分でさえ見たことがない場所をじっと見られるのは恥ずかしい。少年の視線を感じ、秘唇の内側が炭酸のように弾ける気分だった。

逃げようとしても体が言うことをきかなかった。

ひんやりした少年の指が、花びらごと大陰唇を開く。身体の奥が熱くなり、羞恥で身体が震えた。

少年の指先が、花弁を捲り返し、クリトリスを軽くつまみ、粘膜の秘唇へと侵入する。

「んッ」

違和感が身体の奥へと進んでいく。自分さえ未知の部分に、指が深く沈むのは、驚愕と羞恥があつた。死にそんなほど恥ずかしいのに、下腹の奥が疼き、愛液が溢れる。

「まほさんのココ、すごいです……」

少年が興奮にうなされるように呟いた。

「言わないで……くれッ……」

羞恥のあまり目尻から涙が零れてくる。無意識で手を動かし秘所を隠そうとしていたら、足首を押さえてきた手が外され、足が自由になった。

少年が膝で下肢を割り入り、腰を捻じ込ませてきた。

力漲った男根が、スリットに押し当てられる。

「うッ、ううッ」

少年は、亀頭でスリットを押しながら慌てていた。男根を押し込もうとするのだが、緊張している女体は強張らせて押し返してしま

う。余裕がなくなり焦っている少年の後頭部を、まほの両腕がかき抱

いた。暖かい手が髪を撫で、顔を双丘に埋める。

「ごめんね……、慌てなくていいから……」

落ち着いた少年は、力強く腰を突き入れた。亀頭が柔らかい肉にめり込んでいく。

まほは苦痛に顔をしかめるが、少年は小刻みにペニスを前後させながら、処女膜の奥へと進もうとしているが、そのたびに鈍い苦痛が襲ってくる。

「い、痛ッ……、つうッ」

ひときわ強い千切れるような痛みが身体を走る。少年の男根は、さらに膣壁へと沈み込み、子宮口を押し上げる。

「は、入った……ッ！」

痛かったのは破瓜の一瞬だけで、結合部は痺れたようになって痛くはなかった。少年の満足そうな顔を見ていたら喜びがこみ上げて来る。まほは少年に愛おしさを抱いていた。

まほは両手で少年の後頭部を撫で上げる。

「まほさん……、大丈夫……？」

「ん……、平気」

「動いていい」

まほはゆつくりと首肯した。

少年が腰を動かし始めた。熱くて硬い肉茎が、膣奥をえぐって後退する。

「んッ、んんッ……んんッ」

破瓜の傷痕を肉茎で擦られる。しわりとくる痛さに眉根を寄せ

る。

「はッ、はあはあッ、ま、まほさんッ」

少年は息を荒げながら腰を動かした。熱くたぎった触感の膣壁が、男根にまとわりつく感触は恐ろしく気持ちよかった。

まほのヴァギナはとろとろに熱く、男根を締め付けてくる。

膣壁の中央が狭く歪曲しているので、律動すると擦られて快感を与えてくる。肉壁が収縮する様は耐え難い感触だった。

「んんんッ、んッ……あはッ、んんッ」

突き上げるたびに、まほの身体全体が揺すり上げられ、乳房が揺れる。スーツのを着たままなので、余計に扇情的に見える。

少年は、まほの乳房を強く握り締める。

「あッ、あああッ、ダメッ、ダメエッ！」

まほの手が少年の手首を掴むが、その力は弱々しいものだった。掴まれている手首を通してまほの震えが伝わってくる。美しく気丈な女性が自分の下で悶えている。男としての情欲はなおも高まっていく。

「くッ、くッ、くううッ！」

少年の腰の動きはさらにさらに激しくなっていく。

避妊という単語が頭をよぎるが、膣壁の誘惑には抗えず、ぎりぎりまで押し込めて行きたかった。いつ限界が来て放出するかもわからないのに、子宮口を押し上げる勢いで腰を動かす。

股間の奥が熱くなり、熱塊が荒れ狂う。膣奥に深く沈めた瞬間に、大量の射精が始まった。

「ううッ！ あああ……」

少年は情欲に溺れ、そのまま猛りを膣奥に噴射し続ける。膣壁も男根を逃がすまいと吸い付くように蠕動して銜えこんでいた。

「ご、ごめんなさいッ！」

「いいんだ……」

まほの両手が後頭部を撫でる。その温もりが心地よく感じられた。

少年のペニスはさらに奥まで侵入し、残る精液を吐き出ししていた。女の本能が精液を吸い込もうとして膣壁の蠕動を活発化させ

る。

「うッ、ううッ」

長く続いた射精が終わり、一息つくくと、男女の視線が絡み合った。まほは微笑み、少年を見守っていた。おそろおそろ唇と唇を重ねてすぐに離す。

男根が抜かれ、溢れた精液が膣口から溢れ出る。

脱力感に襲われ、そのまま舐を重ねるようにして休息に浸っていく。

終幕

奥付

発行 リーフパーティー
発行日 2019/8/12
発行人 くろうさぎ

ホームページアドレス
<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 大陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載
インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止